

# Gno G-let

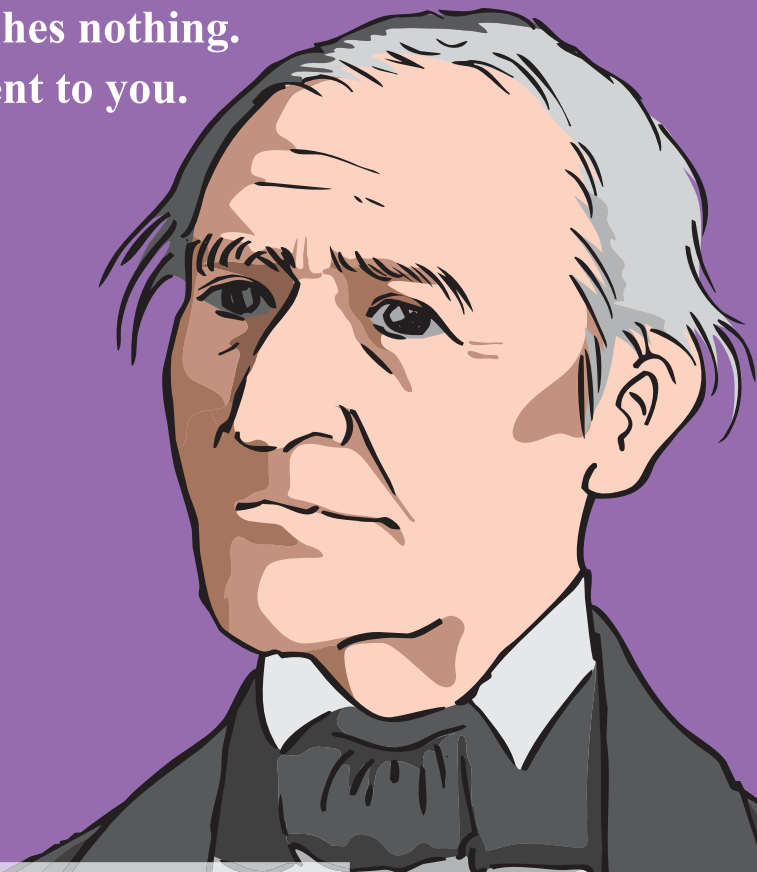
グノレット

vol.7  
2012年1月発行

中学生・高校生の保護者の方へ

Without ambition one starts nothing.  
Without work one finishes nothing.  
The prize will not be sent to you.  
You have to win it.

ラルフ・ワルド・エマーソン  
(Ralph Waldo Emerson, 1803年-1882年)  
アメリカの思想家



## グノーブルOB 英語圏帰国 ▶ 東大生座談会

『僕らはグノで、大人の英語に脱皮した』

GSL (グノーブル独自開発音声教材)  
活用編② / 全3回: 中学

2011年 東大理科Ⅲ類合格 安田陽平くん執筆  
『僕はこうして理Ⅲの門をくぐった! 勉強法大公開』 第3回



Gnobleは、私たちの理念をこめた造語です。  
Gnoは「知」、bleは「力」をあらわします。  
Gnoは、knowを意味するギリシア語、bleは、ableに由来します。  
oiは「知識のつながり」、「人とのつながり」も意味しています。

2012年2月12日(日曜)  
新中1生スタートダッシュ講座 **Sターム** 開講!

新中1生 説明会 **参加無料(予約不要)**

**2/9**(木) 10:30~ 新宿本館  
**2/12**(日) 10:30~ 渋谷本館  
**2/18**(土) 10:30~ 新宿本館  
**2/26**(日) 10:30~ 渋谷本館  
※2/18(土)・2/26(日):新中2~新高3生説明会 同時開催

2011年 大学受験合格実績 第5期 在籍**311**名

東大各学科類

理科Ⅰ類	25名
理科Ⅱ類	10名
理科Ⅲ類	1名
文科Ⅰ類	12名
文科Ⅱ類	8名
文科Ⅲ類	6名

東京大  
**62**名

国公立慶医  
**39**名

医学部医学科106名

東京医科歯科大(医)	1名
東北大(医)	1名
千葉大(医)	4名
北海道大(医)	1名
横浜市立大(医)	3名
筑波大(医)	5名他
※国公立大医計33名	

国公立大138名

京都大	4名
一橋大	8名
東工大	5名
東外大	6名他

慶應大  
**141**名

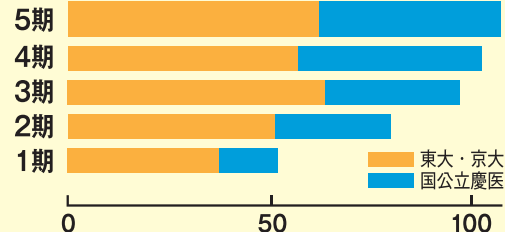
早稲田大  
**148**名

上智大  
**48**名

慶應大(医)	6名
東京慈恵医大(医)	8名
順天堂大(医)	10名
日本医大(医)	8名
昭和大(医)	7名他
※私立大医計73名	

東大・京大 + 国公立慶医 合格実績

5期在籍311名中**105**名  
4期在籍307名中**102**名  
3期在籍271名中**99**名  
2期在籍232名中**79**名  
1期在籍187名中**52**名



GnoTube GNOBLEを動画で体験!

どんな先生がいるんだろう?  
どんな授業をするんだろう?  
グノーブルは何が違うんだろう?

[www.gnoble.com/gt/](http://www.gnoble.com/gt/)

**新宿本館** アクセス: JR新宿 サザンテラス口 徒歩1分  
〒151-0053 JR代々木 北口 徒歩5分  
渋谷区代々木2-8-3 新宿GSビル1F

**渋谷本館** アクセス: JR渋谷 宮益坂口 徒歩5分  
〒150-0002 東京メトロ渋谷 11番出口 徒歩4分  
渋谷区渋谷1-7-6 青山CRビル1F

**お茶の水本館** アクセス: JR御茶ノ水 御茶ノ水橋口 徒歩2分  
〒101-0062 東京メトロ御茶ノ水 徒歩3分  
千代田区神田駿河台2-5-5 東京メトロ新御茶ノ水 B1出口 徒歩4分  
村田ビルディング3F (1Fスターバックスコーヒー)

大学受験グノーブル事務局【新宿本館・受付】

お問い合わせ | 月曜~金曜 15:30~21:00 / 土曜 14:00~21:00 / 日曜休館  
〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿GSビル1F

TEL **03-5371-5487** FAX **03-5371-5488**



一知の力を活かせる人に

大学受験  
グノーブル

グノーブルにアクセス。東大にアクセス。  
[www.gnoble.co.jp](http://www.gnoble.co.jp)  
新宿・渋谷・お茶の水



# グノーB 帰国生座談会

## 『僕らはグノで、大人の英語に脱皮した』

“英語圏の帰国生”と聞くと「英語では困らないだろう」と思う方がほとんどだと思います。もちろん海外での生活が長ければ、きれいな発音で話せるでしょうし、日常会話で不自由することもないでしょう。しかし、英語圏で小中学校に通った経験があっても、その後の生活を日本で送っているのであれば、大学受験に向けて英語力を鍛えていく必要があります。語彙を増やし、正確な英文を書く力を伸ばし、英語での論理力、相応しい教養も身につけていくことが求められます。今回の座談会に参加して下さった3名は、帰国後にグノーブルで学び、確かな英語力を身につけて東京大学に在籍する方々です。興味深いお話を存分に伺えました。（取材：吉村高廣）

### 楽しかったアメリカの学校生活。根本的な考え方の違いも実感。

**石倉：**小学2年から中学2年の初め頃まで、ニューヨークの郊外に住んでいました。入った学校は現地校でしたが、初めは日本人がいるクラスに入れてもらって、いろいろ助けてもらいながら英語に馴染んでいきました。

**桑原：**僕はアメリカに3歳から小学4年まで住んでいました。初めの2年がカリフォルニアで、後の5年がシカゴです。僕も現地の学校でしたが、3歳からアメリカで生活していたので、学校に入ってから比較的すんなり適応できていたと思います。

**玉光：**僕もアメリカのシカゴです。アメリカで生まれて3歳までいて、

一度日本に帰ってきて、10歳から15歳までまたシカゴで暮らしました。

僕の場合は、10歳で再びアメリカに行ったときは、英語が分からない状態で、小学校は日本人学校に通いました。中学に入ってから現地校に通いましたが、そこでは、ESL (English as a Second Language)

クラスに入ったんです。いろいろな国から移住してきて、英語がまだ使えない人たちを集めたクラスです。ただ、周りには日本人も多く、自分から積極的に英語を話さないとあまり会話力は育たないと実感していました。

**石倉：**アメリカの学校で面白かったのは座り方です。日本の学校は全員黒板に向かいますが、僕が通ってい

た現地校では生徒が向かい合って座っていました。低学年の頃などは、教室の床にじかに座っていました。

日本では、生徒が黒板や先生を見つめて話をきちんと聞く、というスタイルだと思いますが、アメリカでは生徒全員の意識が必ずしも同じ方向に向くことにはなっていなかったんだと思います。

**桑原：**アメリカの学校は行事をとっても大事にするんです。クリスマスやハロウィンとか、生徒は皆、思い思いの扮装をしていたり、食べ物を持ち寄ったりで、僕もそういうことに一生懸命だったのを覚えています。

全ての学校がそうとは限らないかもしれませんが、僕の通っていた学校は1年の節目にあたる行事を皆で盛大に祝う習慣があって、とても楽

いしくら まさみち  
**石倉 将道くん**  
東大法学部 3年  
(開成出身)

くわはら しゅうたろう  
**桑原 周太郎くん**  
東大法学部 3年  
(筑波大附属駒場出身)

たまみつ みう  
**玉光 未侑くん**  
東大理11年  
(芸芸大附属出身)

しかったです。

**石倉：**僕の通った現地校にはクリスマスを祝う習慣はありませんでした。日本だと宗教に関係なく誰でも楽しくクリスマスを過ごしていますが、たとえばユダヤ教の人がいる場合などはクリスマスを祝ったりはしません。

でも、僕もアメリカの学校は楽しかったです。盛大に行事を楽しむだけでなく、授業でも退屈したことがありません。日本に帰って授業中に寝ている生徒がいるのを見てビックリしました(笑)。

**玉光：**僕が通っていた現地校では先生の権力が絶対でした。少しでも規則に合わないことをしようものならすぐにしかられて反省文を書かされるんです。僕は、それがイヤだから寝なかったということもありました(笑)。

**桑原：**僕の学校では“Show and Tell”という授業がよくありました。多分アメリカの学校はどこでもそうだと思うんですけど。

**中山：**プレゼンテーションやディベートが重視されているアメリカでは、“Show and Tell”はどこでも大切にされているようです。クラス全員に何か見せながらそれについて話すという授業ですよ。

**桑原：**ある時、僕は、タイムマシンについて話すことになったんです。数日前に読んでいたドラえもんのマングに、人間は猿から進化したと書いてあったので、「人間が猿からどう進化したのかをタイムマシンに乗って見に行きたい」という話をしたら、先生も周りの生徒も「シーン」としてしまいました。僕は何が起きたのか分からずに戸惑っていたら、先生がひと言、「私たちは何を信じているんだっけ？アダムとイブがいたから皆はつながっているんじゃないかっただけ？」と。

**中山：**アメリカでは「創造論」を教えている学校が少なくないそうです。

創世記に書かれているように、地球を含めてあらゆるものは神による創造で、生き物はすべて誕生時から今のままで変わっていないと指導されています。ダーウィンの「進化論」は教えられていないんです。地球の誕生も、科学的な根拠に基づいた46億年前ではなくて、約6000年前ということになっていて、科学的な真実よりも、宗教的な真実を優先しているそうです。

### 自分の意見を主張するか、その場の空気を読むか…。

**玉光：**アメリカにいたときには、僕は自分の意見を結構自由に発言していたんです。人の考えを否定すること、人格を否定することでは違うってことがアメリカでは前提になっているらしくて、自分が人の意見に賛成できなければ「それは違う」とはっきり言えます。それでその人との関係がギクシャクすることはありません。

でも日本の場合場合は考え方を否定されるとまるで人格まで否定されたと感じてしまう人が多いように思います。そこは今でも疑問です。

**石倉：**そのギャップは帰国生の誰もが感じるのだと思います。僕は帰国して短期間のうちに周りの空気を読むようになってしまいました。

**桑原：**アメリカでは、小学生のころから授業中にどんどん発言しますが、日本ではほとんど生徒が発言させません。それは日本の教育の仕組み自体がそうなっているからだと思います。

たとえば僕らの今の法学部の授業は400人で授業を受けるんです。これは、発言しないことを前提に組まれている授業です。それが30人、40人の授業でも同じで、先生が話

しているところを途中でさえぎって質問するなどということは日本じゃ考えられません。そうした風潮があると、何か意見や質問があっても、ためらってしまうんじゃないでしょうか。

**石倉：**自分の意見を持たなくてもいいってことに慣れてしまうと、楽だなども最近実感しています。でも一方で、「それじゃあダメだ」という思いもやっぱりあるんです。

国際社会で求められる人材は、やはり「自分の意見をしっかり持っている人」また「それをはっきり言える人」が大前提になりますから。



グノーブル代表  
中山伸幸

**中山：**皆さんは成長期にアメリカで暮らしている経験ができたと言えますよね。日本では、相手の話を大人しく聞くことが大切なことです。もちろんこれは大切なことですが、先生の言うことに異を唱えないのが従順で良い子だといつも言われていると、英語で話すのはその意味でも難しくなってしまいます。英語圏の人との会話では、相手の意見に反対のときはもちろん、賛成のときでも、単に“I agree.”「そう思います」だけじゃなくて、自分の考える理由をその後に付け加えるのが普通のコミュニケーションです。子供の頃から、「自分はどう考えるのか」と考える習慣がないまま育っていると、英語が出てこないだけではなく、そもそも話すことがない、ということになりかねません。グローバル化がますます進む中で、アメリカで生活し

た経験は今後必ずプラスに作用すると思います。

それから、海外で生活をされた経験のあるご家庭と接点を持つたびに感じるの、家族の結束が固いご家庭が多いな、ということです。海外での暮らしには特別なご苦労をお父さん、お母さんはされたはずで、「家族は大切」という意識が強いように思います。それが、心理学者や精神科医の言うところの「安全基地」としての家庭につながっているとも思います。安心して帰れる場所があると子どもたちは外でがんばれるということです。

**石倉：**先生のおっしゃる通り、確かにうちの父も家族を大事に思っていましたね。父は日本の企業でしたので、そうそう早く帰宅することはありませんでしたが、それにしても仕事が終われば外で飲んだりせずまっすぐ家に帰ってきていました。

**桑原：**先生のお話を聞いていて思ったのですが、よくよく考えると僕は反抗期というものがなかったんじゃないかなと思うんです。

高校時代の友達などは「ここ何ヶ月もオヤジと口利いてないよ」などと言う人もいましたが、なぜそうなるのか理由が分かりませんでした。父親のことはすごく尊敬していますし、進路のことで迷ったりすれば真っ先に父親に相談します。

**玉光：**考えてみれば、僕も反抗期はありませんでしたね。

### 英語圏の帰国生だからといって、英語がパーフェクトなわけじゃない。

**桑原：**日本の中学校では最初はアルファベットの書き方から始まるので当然面白くないわけです。そんなこともあって英語の授業を真面目に聞かないクセがついてしまったんです。

ところが中2になると文法も少し

ずつ複雑になってくるわけで、その時も中1のクセが抜けずにぜんぜん授業を聞いていなかったんです。そうしたら英文法が分からなくなって、確か中3の頃には英語の平均点を下回ってしまったんです。帰国生といっても文法に関してはまったくアドバンテージがありませんでした。

**石倉：**帰国生は、そもそも話をする時や文章を書く時に文法を気にしないので、根本的に必要性を感じていない人が多いんです。

**玉光：**僕は一度帰国した時に小学校で中3までの文法を習ってはいましたが、アメリカに行って文法を気にせずに英語が使えるようになって日本に戻ってきたら、さっぱり分からなくなっていました。複合関係副詞とか言われても、その言葉の意味自体が分からなくて苦労しました。



桑原 周太郎くん  
東大法学部 3年（筑波大附属駒場出身）

**桑原：**帰国生だから英語が出来て当然だし、学校のテストもいつも満点で当たり前と思われてもちょっと困ります。僕たちを辞書代わりにして難しい単語を聞かれても、知らないものは知らないし（笑）。

**石倉：**それに僕らの場合、文法を気にせずに勢いよく書き飛ばす傾向があるため、よくよく見るとミスがあったりします。

**玉光：**大学受験に出る英語は大人の読む文章なので単語の難易度も高いし、教養を持っていないと理解でき

ません。そうした部分は帰国生であるなしに関わらず、必ずどこかで補わなければならないと感じていました。

**中山：**問題は文法用語を知っているかどうかということではないですよ。アメリカで英語を使っていた皆さんの頭には、文法はしっかり備わっているはず。ただ、高度な言語能力を身につけるにはそれなりの努力が必要なんです。

カナダのジム・カミングズという研究者が外国語の習得を2つに分けて考えています。1つが「B I C S : Basic Interpersonal Communicative Skills」という技能で、もう1つは「C A L P : Cognitive Academic Language Proficiency」という能力です。

B I C Sは日常会話を流暢にこなす力で、これは、子供の頃に現地で暮らせば比較的短期間に身につきます。友達同士で話をしているときには、顔が見えて、身振り手振りや周りの状況からのヒントがたくさんあるし、あまり込み入った内容にはなりませんから、不自由なくこなせるようになるのは割に楽なんです。

一方のC A L Pは高度な学習をするのに必要な言語運用能力です。こちらは、内容自体が抽象的で深く、難しい概念の言葉を論理的に組み立てていき、構文も複雑です。幅広い教養や高度な思考力も必要になりますから、言わば人間としての成長が必要で、こちらの能力は簡単には身につかないとされています。

このC A L Pという能力を意識的に鍛えていかないと、その外国語の能力は子供の能力のまま終わってしまい、高度な内容についていけません。実際、東大の入試で扱われる英文は内容的に深いですから、日常会話がスラスラできるだけでは対処できません。

ただ、C A L Pの方は、実は現地になくとも鍛えられます。目の前にいる人とのコミュニケーション能力を高めるわけではありませんから。**石倉：**今の先生の話、とてもよく分かりました。確かに帰国したばかりの頃の自分にはC A L Pは足りなかったと思います。

**玉光：**僕も今の先生のお話にすごく共感しました。現地で読んでいた文章や高校の教科書なら、読んですぐに理解できたのですが、グノの教材や東大の問題は読んでも理解できなかったんです。表面的な意味が分かっている、何を言いたいのが理解できない。そこを鍛えてくれたのがグノーブルでした。

**桑原：**僕らのように感覚で英語を読み書きする帰国生は、現地で身につけたB I C SにC A L P的な論理力とか教養部分が加わることで、「子どもの英語」から脱皮して「大人の英語」が使えるようになるということなんですね。

**中山：**日本語だって、小学生から高校までずっと「国語」の勉強をするわけです。それがあからこそ、次第にレベルの高い文章を読み書きできるようになるわけですからね。

### 帰国生の実感した、グノーブルの魅力。

**玉光：**グノに関しては母親がいろいろ調べてくれていたのと、それから、東大理Ⅲに合格した学校のテニス部の先輩が「グノは素晴らしい」と絶賛していたので決めました。

**石倉：**僕がグノに通い始めたのは、開成の友だちが通っていたことがきっかけです。他の授業とはスピードが違いました。解釈も英語の語順のまま、頭からどンドン訳していく授業だったため「これはピッタリだな」と思いました。

**桑原：**僕は、グノに来る前に他塾の講習にも行ったことがあるんです。英文法があまりにも不得意になっていた（笑）。でも、全然つまらない授業で通い続ける気持ちにはなれませんでした。その後、友だちから聞いてグノに来てみたんです。そうしたら、通い始めて2日目、中山先生が「桑原くん、こんにちは」と挨拶してくださって、それがすごく嬉しかったんです。もう名前を覚えてくれている、ということにまず感動しました。

授業も、石倉が言っていたように、スピーディだし、楽しくて、文法も初めてよく分かるようになりました。文法の説明が教科書通りじゃなくて、ネイティブの発想に基づいた説明で目からウロコでしたし、文法の大切さも分かりました。正確な英文を書くには、やはり文法力は大切で、その力を養えたのはグノのおかげです。



石倉 将道くん  
東大法学部 3年（開成出身）

**石倉：**グノには帰国生が多く通っていたので、同じ帰国生にライバル意識を持って勉強できました。その上、帰国生以外にもすごい人がたくさんいました。この前のグノレットの「OB座談会」に参加していた東大医学部の亀井くんもすごく優秀でした。

**桑原：**僕も「帰国生がけっこういるな」と思っていて、そんな点でもすごく親近感がわきました。普段の生活では自分の周りに帰国生がいなか

ったので、あの頃は気持ちの上で少し疎外感を感じていたんです。グノに通い始めて、帰国生が多いということは、たぶん自分と同じ境遇の人が多いただろうという安心感がありました。

**玉光：**実は最初、「ぜんぜん余裕だろう」と思ってグノに入ったんです。ところが、石倉さんのお話じゃありませんが、ずっと日本で生活してきた人なのに、帰国生以上に英語ができる人がいて驚きました。

**桑原：**グノに入って、いろんなことが「良かったな」と思いましたが、僕にとってグノの魅力で大きなウエイトを占めていたのは、やっぱり中山先生ご自身の魅力です。毎回の授業で、大量の英文をとっても深く、しかも早口でよどみなく解説される姿にはいつも、「なんて頭の回転が速いんだ！」と驚いていました。

それから、受験直前期には毎日のようにF A Xで添削をお願いしていました。翌日には先生から返信があるんです。僕だけじゃなく多くの生徒がお願いしていたはずなのに、一切手を抜かず最後まで指導してくださったことは大きな励みになりました。

**石倉：**中山先生からは、英語だけではなく、教養についてもいろいろな角度からの指導を受けました。

実のところ受験勉強をしている時は、「英語の得点力がつけばいいや」といった発想で勉強していたんですけど、大学に入ってみてグノ時代に中山先生から教わったことが大いに役立って、あらためていろいろなことに興味を持つことの大切さを実感しています。授業中にちょっと横道にそれたところの話が深い意味を持っていたり、先生に教わったことは本当にたくさんあります。

**玉光：**中山先生にはカリスマ性を感じます。1つは人柄で、もう1つは

教養です。

人柄的なことでは桑原さんもおっしゃっていたように、すぐに生徒の名前を覚えてくださることと、一人ひとりを大事にしてくださることで

す。そして教養的な面では、グノで扱う文章はレベルが高いので、先生の方も英語の知識はもちろん、文の背景的なことまでしっかり理解されていないと扱えないようなものだと思うんです。そうしたところも完璧に授業されて、一人ひとりの生徒の課題と向き合いながら、長時間の授業をされるわけです。ちょっと信じられないくらいすごい人だなと思っていました。

中山：これまで、多くの帰国生と出会ってきましたが、中には、ある程度英語力があるため、それが逆に災いとなって自分の課題になかなか気づけない人もいました。

今日出席していただいている皆さんの共通点は、質問や相談によく来てくれたことです。それも、とても具体的な質問だったり、「ここを手伝って欲しい」と明確なリクエストをしてくれました。たとえば、石倉くんの場合、英文の意味は完璧に分かっているのに、和訳するときうまく日本語にならないのが課題でした。「意味がとれているからいいや」ではなく、その力を鍛えるために、毎週、毎週、答案を見させていただきました。私が持ってらっしゃいと言ったのではなく、石倉くんが自分で決めて、大量の英文和訳を本当に長期に渡って持ってくる姿には密かに敬服していました。

こうした姿勢の背後にあるのは、自己分析力だと思います。自己分析が上手くできる人は、変に不安にかられたり、慢心することがありません。冷静に自分が見えれば、対策プランを立てやすくなります。こういう

力は、大学受験に限らず、これからの人生にも間違いなく役立つと思います。

石倉：グノはとても懐の深い塾だと僕は思っていました。僕たち帰国生の要求にもしっかり応えていただきましたし。それと、大学受験の英語に関しては、グノでやることだけで十分だという安心感がありました。そのかわりグノの教材は全部やる、とことんやる、という方針を貫いていました。

これは強く言っておきたいことですけれど、帰国生だからということではなく誰でも、英語をグノで学ぶなら、他の問題集や単語帳に手を出さないで、グノの勉強だけやって、それを突き詰めて理解すれば東大受験の英語はまったく心配ありません。

桑原：同感です。

玉光：僕も同じ意見です。

### 東大にいても英語力は低下する。でも僕らは不安を感じていない。

石倉：僕の場合は、文Ⅰに入って、やっぱり頭のいい人が多いというのが率直な感想でした。法律の勉強をしていますが、自分が数回読んでようやく理解できるような人もいて、とてもかなわないと思うことが度々あります。僕は高校の時から努力型でしたが、東大に入って天才型の人のすごさ、東大のすごさを思い知りました。

桑原：ただ、英語に関してはどうでしょう。受験が終わると多くの人が英語から遠ざかってしまうので周りに聞いても受験が終わった直後が一番力があつたと言いますね。大学に入ってから英語の授業が少ないので自分から意識して英語にかかわりを持っていないと英語力は落ちてしまうと思います。

特に、高校時代に受験用の勉強しかやってこなかった人は、いかに東大生であろうと英語力がどんどん抜け落ちていくんじゃないでしょうか。

石倉：僕は東大に入って留学生の友だちをつくって英語をできるだけ話す機会を作ってきました。授業だけ受けて、聞かない、話さない、書かないといった毎日が続くとも英語力は明らかに低下していくと思います。



玉光 未侑くん  
東大理Ⅰ年(学芸大附属出身)

玉光：僕の場合はまだ実感していませんが、受験の時に比べて明らかに英語に触れる機会が減ったので、お二人の意見は参考にしたいです。

ただ、グノで学んできた英語というのは、単なる受験英語ではなく、「使える英語」ということを前提としていたので、大学に入って英語に触れる機会が少なくなったとはいえ、根本的な部分で英語に対する理解の深さが違うと自負しています。

桑原：そこは僕も感じています。グノの授業は、知識を単に覚えていくのではなくて、英語の発想の根幹を大切にして、派生的に出てくる知識はすべて関連性を持って学びます。もちろん、今はその細かい部分について逐一覚えているわけではありませんが、根幹となる部分を押さえていて、そこを深く理解しているので、グノで学んだ力は今でも生きています。

たとえば、英文を読んでいけば意

味が分からなかったり、忘れてしまっている単語が出てくることがあります。グノでは、文脈を大切にして英文を読むことが徹底されていましたから、あらためてその文脈を捉え直すために読み返してみるんです。そうすると、その単語の意味がかなり適確に推測できたり、思い出せたりします。単語の成り立ちもしっかり指導を受けましたから、そこから意味が見えてくるものもあるし、そうしたパターンが僕の中には数多く残っているので、「いつでも取り返せる、やれば伸ばせる」という気持ちがありますね。

石倉：僕が思うには、どれだけグノで勉強していようが、大学に入って一切勉強をしなければ、やっぱり力は落ちるはずですが、仮にそうなったとしても、グノで英語を学んできた人は、落ちたところからの挽回が圧倒的に早いと思います。高校時代や受験期にどんな英語を学んできたかで大学に入ってからや社会に出てから大きな差がつくんじゃないでしょうか。

中山：東大に入って、英語を使う機会が増えるのではなくて減ってしまうのは残念なことですね。ただ、時代の流れから考えても、東大が検討している9月入学のことを考えても、数年のうちに大学環境も変わっていくことになるとは思います。

ただ、環境が変わるのを待つのではなく、自分からも求めていくことは必要かもしれませんね。ある英字新聞の編集局長をされている方の本を読んでいたら、新人記者には、本を重ねて身長2倍になる読書をするよう要求していると書いてありました。いい英文記事を書く基本は“読むこと”ということなのですが、実は、読むことが、書くだけではなく、聞く、話す場合にも基本だと思います。

でも、読むことが大切、たくさん

英文に触れよう、と言っても、いちいち英文を文法的に解析していたら、そもそも大量の英文を読むことなど不可能ですよ。やはり、中学、高校時代に英語を英語のまま捉えていく根本を学び、しっかりした土台づくりをすることは大事だと思います。

### 大学受験で学んだこと、培ったもの。

玉光：東大の入試の点数って、その人の力や努力の量を結構反映しているんじゃないかと思うんです。グノで学んだ英語をはじめ、入試の点数ではそれなりの点数がとれました。それは勉強のやり方が分かってきたという思いにつながっています。

大学に入って、必ずしも授業に熱心ではないのですが(笑)、それでも、試験になればやれるという自信がありますし、事実、今のところやれています。

石倉：僕がグノで学んだことは、忍耐強く努力し続ける習慣です。コツコツと計画的に勉強していても、途中でくじけそうになったこともあります。それでも諦めずに努力し続けられたのはグノの環境や先生方のおかげだと思いますし、それが今になって活かしています。

今は資格取得の勉強をしています。東大受験以上に知識量が多くて

時間がかかります。それをコンスタントに続けられるのは、やはり受験期に培った力が大きいと思います。コツコツ続けていけば、必ず目指すところに到達できるという確信があるから、今の勉強も続けることが出来るのだと思っています。

桑原：根本を学ぶということについてもう少し言うと、「本質を踏まえた上で知識を積み重ねていく」というやり方で受験勉強ができたことがグノの良かったところだと思うんです。

実は、受験勉強で頑張ったのに、覚えたことを見事に忘れてしまった科目もあるんです。やはり、物事を学ぶ姿勢や理解するときの方法は大切で

すが、法律にも根幹になるものがあるって、そこから様々に派生していく流れをつかみ、その上で全体を捉えると、一見煩雑に見えるものも見え方が変わるとは思います。

英語や法律に限らずどんな勉強や他のことでも言えますが、今やっていることの本質は何なのかを考えて、それを踏まえて知識や技術をしっかり身につけていくことが大事だと思います。こういうことは、東大受験のときに身につけたことだし、そういう考え方ができるという点が僕の自信の源になっていると思います。





# GSL

(グノーブル独自開発音声教材)  
活用編②/全3回:中学

グノーブルの生徒さんたちが、中学1年生で初めて触れるGSL。それは、中学時代に習得しておくべき英文法の、最も効率的な勉強方法です。効率的であるとはいえ、毎日続けることが何より肝心。そして、GSLでの学習を、いち早く習慣化できれば、学校での活躍はもちろん、高校生になってからも自信を持って英語に取り組めるようになります。関田・清水両先生は力説します。

(取材：吉村高廣)

は、その後さらに高度な英語を学ぶ上での土台になります。重要な文法をたくさん学びます。それらをしっかり身につけるためには、目も耳も口も総動員して学ぶことが大事です。最初はテキストを見ながらでもいいのです。音声化された例文を耳で聞き、音読をして英語のリズムを体得します。そして、それが完全に体に染み込むまで何度も反復します。そのことによって、必要な時に必要な文法を音として引き出せるようにすることが、グノーブルならではの英語学習の特長です。

高校生になると、できるだけ短時間で英語を情報処理していく能力が求められます。必要な情報を素早く引き出して組み立てていくことが要求されるため、中学生のうちでどれだけ多くの文法がストックできているか、またそれを、適切に引き出すことができるかが重要な課題になります。そうした力を鍛えていくのが中学生のGSLなのです。

関田：GSLを通して、中1の初めから中3の終わりまでに学ぶ例文は約3千数百にも及びます。もちろん全てが別々の項目を扱っているわけではなく、1つの文法を多角的に学べるように工夫されているのです。不定詞を例にとれば、初めて扱うのが中1のFターム（1～2月の最終学期）です。その後、中2のGターム（4～7月の学期）とEターム（9～12月の学期）、さらには中3以降と、内容を深めながら不定詞を学ぶことになります。

なぜここまで“手を変え品を変え”、そして間を置いて1つの文法を学ぶかといえば、その方が、身につけやすいからです。「体に染み込む」という方が的確でしょうか。

そもそもネイティブの方であれば不定詞の用法などは



英語科 関田 裕一

## 英文法の土台は、 目と耳と口を総動員して築くもの。

清水：GSLを活用する学習は、たとえば九九をイメージしていただくと分かりやすいと思います。小学生で初めて九九に触れる時、必ず声に出して覚えますよね。計算を眺めているだけで九九をマスターできるお子さんはまずいないはずです。ほとんどの場合は繰り返し発声することでリズムに慣れ、目と耳の両方から計算が頭にインプットされていきます。つまり、声に出して物事を覚えていくというのは、とても合理的な身につけ方と言えるのです。

そして、一度音を通して九九を覚えてしまえば、忘れることなく、必要な時に必要な計算が音として引き出せるようになってきます。算数から数学へ、そしてさらに学年が進んでも、これは土台となって役立ち続けます。

私は、英語も同じだと思っています。中学時代の英語

考えずに、文を読みながら意味を取ることができます。それは、私たちが日本語を読む場合に文法を意識しないのと同じです。

したがって、日本人が第二言語として英語を勉強する場合も、我々が小さい頃から日本語を身につけていくように、ある程度の時間をかけて、生徒たちの成長や経験に合わせて英語の論理を体で覚えていけばいいのです。それを行うためのツールがGSLなのです。

## GSLは毎日の「素振り」のようなもの。 続けることで“英語のカタチ”が出来上がる。

関田：GSLを使った基本例文のワークアウトは地道な訓練です。スポーツ選手が1つのカタチを身につけようと、何度も何度も同じことを練習するのと同じです。それは、ある道で一流に達した人でもやっているはずですし、むしろ一流と言われる人ほど日頃の地道な努力を怠らないものではないでしょうか。

GSLも同様で、野球のバッターでいうなら、毎日の素振りのようなものと考えていいでしょう。英語（文法）のカタチを身につけて、『使える英語』を習得するためにも、地道な努力を、中学生のうちから毎日欠かさず続けることが肝心なのです。東大を初めとした難関大学に合格したグノーブルのOB、OGの皆さんも、ほとんど、こうした努力を積み重ねた方ばかりです。

最近では、以前にも増して音声を変えた英語学習が注目されていますが、ただ音に耳を傾けているだけでは英語力は向上しません。大切なのは、まず授業です。

授業で理解したことをGSLを使って復習することで、理解が深まり定着する。こうした手順がなくては、単なる『オウム返し』になってしまいます。一度授業で理解したことを再度音声で聞いて、音読、暗唱する。この繰り返しが必要です。

リスニングの後、耳に残っている音を利用して、1つの例文につき少なくとも5回は音読していただきたいと思います。その後の暗唱については最低でも10回はすべきでしょう。これをちゃんとやればかなり時間もかかりますし、口も疲れます。慣れないうちは大変に思うこともあるでしょう。しかし、これをきちんとやっている生徒さんは、中学時代で必ず英語の土台が出来上がります。

## GSLを習慣化した人たちは、 学校の授業でも大活躍している。

清水：GSLを使った勉強法の実践は、学校の英語の成績にも明らかに反映されます。英語を勉強していく上で

大切なのは、様々な例文に対応できる“型”を正しく身につけることです。ひいてはそれが本質的な英語力の向上につながるのです。

実際に、グノーブルのクラス分けテストではあまり点数が取れなかったけれど、学校のテストではかなりいい点数が取れたと報告にくる生徒さんもいます。最初はグノーブルの方が進みすぎていることもありますが、その場合には、グノーブルでやった内容を学校の授業で復習することができます。となれば、理解はさらに深いものとなっていくため、学校での活躍はますます期待できます。



英語科 清水 誠

GSLはあくまでも復習教材ですので、授業で習って頭に残っているうちに、なるべく早めにやっていただいた方がいいと思います。音声はテキスト1冊につき、まとめて事前にダウンロードできるので、授業で習ったことを即、帰りの電車の中で聞くこともできます。

とはいえ、聞くだけなら電車の中でもできますが、声に出して発音するためには自宅での学習が必要でしょう。このあたりは保護者の方がしっかりやっているかをチェックされるのも悪いことではないと思います。

またテキストには穴埋め形式などの演習問題もあります。これに取り組む場合もGSLを聞いた後の方が圧倒的に効果的です。頭の中に、正解が音として響いてくる感覚が実感できるはずです。

なにしろGSLは習慣化することが効果を上げるポイントですから、歯を磨いたり顔を洗ったりと同じように、カラダが自然とGSLに向かうように自分を仕向けることが理想的です。それをきちんと出来ていけば高校生になってからも自信をもって英語に取り組めるようになります。



2011年 東大理科Ⅲ類合格 安田陽平くん執筆

『僕はこうして理Ⅲの門をくぐった！  
勉強法大公開』第3回やすだ ようへい  
安田陽平くん(東大理科Ⅲ類1年 栄東出身)英語の勉強は、**グノの予習復習だけ。**  
内容も量も、それだけで十分。

こんにちは。今年の受験が近くなってきていますね。グノの後輩がたくさん大学の後輩になってくれるのが待ち遠しいです。

※

さて、今回は具体的にグノに行くようになってからの僕の英語の勉強について書こうと思います。

僕は埼玉の高校に通っていたので、正直グノのある新宿や渋谷は遠かったのですが、行き帰りの時間を授業の予習復習に利用していました。復習はともかく、予習は授業直前にやったほうが問題を自分がどう考えたかが頭に入ったまま授業に挑めるのでおすすめです。ぜひ試してみてください。

僕はグノに入ってから、基本的にはグノの予習復習以外は英語の勉強はしませんでした(宿題は基本的に予習でした)。

とはいえ、予習の文章の量は少なくなく、また、授業では難しく深い英文を中心に扱い、復習はかなりの時間をかけることができたので、グノの場合は内容的にも量的にも、英語の勉強は予習復習だけで十分なのです。

授業の問題レベルが上がった高三。  
予習重視から復習重視に変更。

僕は高2のうちはまだ周りに比べて劣るところも多く、予習をするのに精一杯で、実際にはあまり復習はできませんでした。それでも高2の授業では、覚えるべき単語や文法は演習に何度も出てくるため、解説さえ集中して聞いていれば自然と身につく、授業についていく実力はちゃんとついていったと思います。

もちろん、個人差はあるとは思いますが、聞くだけで身につくことも多いので、授業をとことん集中して受けることが何よりも基本だと思います。

高3では、予習よりも復習を重視するようになりました。授業で扱う問題のレベルがあがったためです。高3で扱った文章や文法は、単語的にも文法的にも難しく、

時間を空けて見直すと授業が思い出せなくなってしまうので、一度やった内容も定期的に見直すことでようやく身につけることができたように感じます。

とはいえ、すべてを復習するのではなく、新しく学んだことや重要な項目が多いと思ったプリントから順に必要なと思うもののみ復習していました。それを選び基準として、先生の「これを見返すべき」などの指示や、先生が解説にあてた時間などを参考にしていました。

理科に時間をとられ始めた高三の夏。  
GSLを使って学習効率がアップ！

復習において有効だと感じたのはGSL(音声教材)です。以前はiPodなどを持ち運ぶ習慣がなかったので、実は高2の頃はほとんど利用していませんでした。今思うと、そのために、このころは英語が比較的得意な割に復習に時間を取られていました。しかし、高三の夏くらいから理科に時間をとられはじめ、英語を効率的に勉強する必要がでてきて、その方法を試行錯誤で模索した中もっともよいと思ったのがGSLと音読の併用でした。

音読による復習は、前回のコラムに書いたように、文章を戻らず読む練習として非常に効果的でした。一方で、音読は自分の家のような、周りを気にしなくてよいところではできないという短所もあります。

一方、GSLは周りの環境にかかわらず隙間時間でできるのが長所です。シャドウイングやディクテーションなど、リスニング力強化につかうこともできるだけでなく、授業で扱った文章を収録しているため、授業を思い出しながら、文章を戻らずに(音は流れていくので…)意味を解釈する練習ができるといった点で音読の利点も備えています。

そうした点でGSLは非常に効率化に役立ちました。

大学での英語で力不足を感じる時、もっと早くGSLを利用していたらもっと英語が得意になっていたろうにと、今でもよく後悔します(笑)。グノで勉強していくみなさんにも参考にしてもらえると幸いです。

グノーブルのロゴマークが変わりました。



Gnooble

大学受験 グノーブル

生徒の未来、社会の未来のために。  
授業への熱意を、このロゴマークに込めました。

シンボルマーク は「生徒一人ひとりの飛躍、それをサポートする私たちの姿勢」、「知識の有機的なつながり、人と人とのつながり」をあらわしています。

文字の形の **Gnooble** は「力強く、かつ、暖かく優しく」というグノーブルの心がまえをデザインしたものです。そして色は、生命力のあるグリーンです。

※シンボルマークについて

2つのGが重なるこのマークは「スイングバイ」が発想の元。NASAの宇宙探査船などが利用している航行法です。たとえば、木星探査船ガリレオは、はじめは金星に向かって打ち上げられ、金星の周りをぐるりと回る間に、その金星の重力の助けを借りて一気に速度をあげました。また、JAXAのはやぶさも、地球の重力を利用してぐんと加速し、目標に向かいました。

私たちは、地球の重力のように生徒たちの飛躍を力強くサポートします。生徒たちは、グノーブルで力を養って志望大学に進み、さらにその先へと歩きます。



新宿本館



渋谷本館



お茶の水本館

お茶の水本館  
オープン

## 晴読雨読 この一冊 『人間の建設』

二人の天才が語り合った、日本史上最も知的な対話。

近代評論の礎を築いた日本文学界の巨人・小林秀雄。かたや、多変数解析関数論の分野において独創的な業績を残した世界的数学者・岡潔。この2人がそれぞれの観点から、学問、芸術、文学、科学、思想、そして日本人の情緒ということについて語り合った貴重な対談本。文学者と数学者の対談といえば、対照的な異分野交流と考えられがちだが、豊富な知識と研ぎ澄まされた感性を持ち、その道を究めた2人の天才の言葉は、決して平行線では終わらない。書中、印象的だったのは、「人は極端に何かをやれば、必ず好きになるという性質を持っています。好きにならぬのがむしろ不思議です。好きでやるのじゃない、試験目当てに勉強するというような仕方は、人本来の道じゃないから、むしろそのほうがむずかしい」という言葉だ。脳科学者の茂木健一郎は『あとがき』において、本書の魅力を実にうまく述べている。「二人の『知の巨人』の思考パターンのようなものが、肉体に染み込んでくる。その結果、自分が少しだけ賢くなった気分になる」と。まさしくその言葉通り、次代を担う若者にとっては必読の一冊である。

小林秀雄 岡潔  
新潮文庫  
(362円/税別)

## 編集後記

日本を揺るがす出来事が起こった2011年は、『絆』という言葉をもって幕を閉じました。そしてまたグノレット編集部も、その言葉の意味を改めて実感した1年でした。5号、6号で登場して下さったOBの方々や、今回の7号でお話しを聞いたOBの方々。グノーブルで学び集まった後、それぞれの大学、それぞれの学部で活躍される皆さんは、今なお先生と固い絆で結ばれていることを知りました。今年もグノレットでは、太い絆で結ばれた多くの声を紹介して行きたいと思っています。さらに、現在グノーブルで学ぶ生徒さんの中には、これからがいよいよ受験の正念場という方も少なくないと思います。最後まで学びの手を止めずに頑張ってください。そしていずれ、あなたの絆を聞かせてください。健闘をお祈りします。

◆今回の表紙は、アメリカの思想家ラルフ・Wエマーソンです。英文は『野心がなければ何も始められない。努力しなければ何も終われない。褒美とは贈られるものではなく、勝ち取るものである』という内容です。(編集責任: 吉村高廣)

